恵まれない（？）裏方の北方前線

笹野　一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恵まれない（？）裏方の北方前線

【Ｎコード】

Ｎ８６１５Ｙ

【作者名】

笹野　一

【あらすじ】

これは裏の世界と表の世界の中で起きる事件を元一般人の北山漣が平野　りさ達と共に解決していく物語です。ある日買い物に行ったった漣の見た「異変」は漣を戦いの渦に巻き込まれていく・・・

異変（前書き）

受験生の中３が書いた戦い形の話です。
勉強もあって不定期ですが連載していきたいと思います。
初めての投稿なので温かい目で見てください・・・
尚、この物語はフィクションであり、登場する人物、団体などは・・・
＜以下：省略＞

異変

最近の新しい権利に「知る権利」というものがあるが、知らないほうがいいという情報もある。

その知らなくていい権利は国単位で守られている。守る理由はパニックを招くからだ。

しかし、現代のインターネット化により情報は一瞬で全世界に送られる。しかも、インターネット上に送られた情報は消えることがないので、どう頑張っても「知らない権利」を守ることは難しい。

では、もし徹底的に出来事を知らせないためにはどうすればよいか？

それは簡単なことだ。その出来事に関する記憶、情報、痕跡すべてを消し去ればいい。

夕焼けがきれいな急な坂。そんなところに自転車に乗った少年＜以下：北山（きたやま）　漣（れん）＞　がいた。紺色のジーンズに、薄手の白いパーカー。普段着のまま近くのコンビニ　＜以下：坂の下にある近所とはいえないコンビニ＞　に向かっている。漣が見た、夏でも沈むのが早いの夕陽は地平線に接したところだ。

そんな何気ない光景で前触れも無く異変が起こった。右側にあった民家が跡形も無く消えたのだ。実際には移動したのだが漣にそんなことはわからない。

「な、なにが・・・」

理解のできない脳が出した言葉は単純なものだったが、漣の表情は複雑な感情で覆われていた。

だが、容赦のない現実は次々に異変を起こす。先ほどの移動を口火にしたかのように民家が再び移動を開始した。

ようやく理解の追いついた漣は反射的に民家や電柱などと、同時に音が立て続けに発生している場所に向かっていた。そこが異変を見た場所からあまり遠くない公園だったのはすぐにわかった。
好奇心旺盛だという理由で自分の行動を片付けることもできるが、今回は何かが違う。頭の中に直接訴えるような違和感があったのだ。
公園にはあっという間にたどり着いた。着いたときには轟音が鳴り止み、静寂が訪れていたが、緊張感は空間いっぱいに満たされていた。
その中に奇妙な人影が3つある。
「リサさん。いい加減使えるようになってください。」
「うるさいな～。おまえらがやってくれるからいいじゃん。」
「いつまでも僕たちと一緒とは限らないでしょ？」
場に合わない聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「そうなった時はおまえをもらうからいいよ。」
「だめだよ～。リュウゴはあたしのだも～ん。」
「まあ、その話は後にして。さっさと片付けますよ。」
最後の男の声の主は胸の中心に右腕をもっていった。周りの荒れた光景も合わせて見ると、悲惨な戦場に祈りをささげる神父のようだ。
そして本日最後の異変が起こった。
男の体から澄んだ水色の光が漏れ出し、神秘的な光景が作り出される。光は荒れた光景を元に戻し、日常を作り出す。沈みかけた夕陽と重なり民家が平穏を物語った。
漣は再度信じられない光景を見て絶句した。
「・・・ッ」
声にならない叫びが唇の隙間を通り抜ける。
それでも驚きの繰り返しだったため最初ほど理解できないわけで

はない。何か事情を知っている3人に説明を求めるため歩み寄った。
真っ先に聞いたのはここに来たときから気になってたこと。
「龍吾（りゅうご）・・・じゃないか？」
いきなり声のかけられたクラスメイト　＜以下：三城（みき）　龍吾＞
は体ごとこちらに向けてきた。
「やあ、漣。どうしたんだいこんなところで？」
いつもクラスで交わしているのと変わらない、少し気障な口調で
問い返してきた。目の前にある惨状を前にした後でも何も感じてな
いような愛想笑だった。
「どうした・・・って、それはこっちが聞きたいよ。今までのは
なんだったんだ。家が消えたり、現れたり。終いには何も無かった
かのように元に戻って・・・。龍吾は何か知っているのか？」
話の途中から龍吾は驚き、知っている女子　＜以下：小菜木（こなぎ）　結（ゆい）
＞　と見たことのない少女は周りを見回し警戒の意思をあらわにし
た。龍吾の漣を見る目は、宇宙人を見るような信じられない者を見
る目だった。
「どういうことだ？本部には連絡したはずだが。」
「龍吾の言うとおり。本部には連絡もしたし、『改操（かいそう）』も成功し
たって応答も来てる。」
漣のことは忘れ、3人の世界に入り込んでいた。
しばらくして、小菜木が口を開く。
「もしかして、ヘレルの一族？」
「ウソだろ！『改操』を打ち消すほどの一族は三大原族しか！」
見知らぬ少女は近所迷惑も考えず、大声で反論した。
「その三大原族じゃないですか？水の原族が２０年ほど前に蒸発
してますし」
さすがに話の内容が解らなさすぎたのか、漣は3人に説明を求め
た。

漣は3人からいろいろな事実を聞いた。
「つまり、今俺たちのいる世界とは別にもう一つ『裏界』ってのがあるんだな？」
「うん。そうだよ～。」
小菜木はテンションの高さを維持しながら、豊富なバリエーションで肯定してきている。
「っで、龍吾に小菜木、それに・・・リサさん？は『裏界』の人間なんですね？」
「おう。さん付けじゃなくてリサって呼んでくれ」
漣は頭を抱えて唸りたかった。実際にそうできなかったのは万が一にしゃがんでしまうと、小菜木のスカートをのぞくような体制になるからだ。
3人は隠す様子も無く話してくれた。
この世界とは別に『裏界』と呼ばれる世界があること。『改操』とは世界中の人間の記憶を操ること。龍吾がやったのは建物の修復だということ。＜以下：ありえない出来事を無かったことにすること＞　さっきのは戦いで、リサさんが相手を始末したこと。龍吾たちは『裏界』の警察みたいな立場で、戦った敵　＜以下：犯罪者＞からこちらの世界の人間を守っていること。他にも言われた気もするが、把握できたのはこれくらいだった。
「それで、俺は何で記憶が消えないんだ？」
さっき驚かれたのはこれが原因らしいが、理由までは理解できなかった。
「推測でしかないけど漣がヘレルの一族、それも三大原族の可能性があるからだよ」
「ヘレルの一族っていうのはね～『裏界』で元から能力持っている一族のことだよ～♪」
「それで、三大原族ってのはさっき説明したから解かるだろ？」
「いや、それもさっぱし・・・」

龍吾は呆れた態度を肩で作りながらも教えてくれた。
「三大原族はヘレルの一族の中でも特に有力な3つの一族で、火、雷、水の一族の総称だ。しかも原族は完全に『改操』の影響を完全に受けない。つまり漣が三大原族かもってことだ。」
「おう、わかった・・・」
「ホントに大丈夫かよ」
リサまでもが呆れた表情になってきたところで龍吾が意味深なアイコンタクトを小菜木ととった。
「じゃあ僕たちはそろそろ帰ります。」
「詳しいことはまた明日学校でね～漣君、リサちゃん、じゃあね～。」
龍吾がきびすを返して腕だけで、小菜木は体全体で手を振る動作＜以下：バイバイ＞ をしてきた。
「じゃあな。」
「おう。また明日！」
坂によって背中の見えなくなったところでリサに話しかけた。
「俺たちも帰りましょうか？」
「おう、帰るとする・・・か・・・ってあーーーーーーーーーー！！」
再び近所迷惑の関係ない絶叫が響き渡り、ご近所さんの注目を集めた。リサはポケットから携帯を取り出し電話を掛けだしたが、お決まりの音声 ＜以下：お掛けになった電話は電源が入って・・・＞ が聞こえたらしく、舌打ちと共にもとの場所にしまった。
「ど、どうしたんですか？」
三度状況においてかれた漣は状況を整理するため説明を求めた。
「オ、オレ今日から結の家に泊まる予定だったから・・・」
「それなら今から行けばいいじゃないですか？」
リサは首を横に振り、質問に答えた。
「結の家がどこにあるか知らないんだって・・・」
「・・・お金は持ってません？」

「『裏界』の金はあるけど円はない」
「じゃあ泊まる場所は・・・？」
「ないってことだ・・・」
漣たちはその場で無言のまま立ち尽くした。
そんな状況を嘲笑うかのように漣の携帯にメールが届く。
『リサさんを家に泊めてね（（笑　ｂｙ龍吾』
「龍吾ォォォォーーー」
ようやくはめられたという感覚が三度目の正直の注意と共に訪れた。

漣は今一人暮らしをしている。両親と暮らしていたが、１年前の交通事故で肉親を完全に失ってしまった。唯一連絡の取れた親戚＜以下：伯父＞　は海外に居て、一旦は海外留学の話も出たが、英語も話せず、ましてや元からこの地を離れる気のない漣は結局一人暮らしをすることになった。
そんな普段ではこんな遅い時間に人の来ない家に小さな女の子がやってくる。
「お、おじゃまします・・・」
「ど、どうぞ・・・」
来訪者であるリサは遠慮気味に家の奥へと入っていった。
また、家主である漣も女の子を意識する年頃　＜以下：思春期＞なので、顔を赤くしながらも迎え入れた。
面白半分にこの状況を作り上げた龍吾に電話を掛けても繋がらず、野宿するわけにもいかないので、リサは漣の家に泊まることになったのだ。
漣の家は幸いにも一人暮らしには広すぎるくらいなので、部屋も有り余っているし、小さな女の子一人増えてもスペース的には問題

ない。
だが精神的には問題があると漣は思っていたのだが、そんな問題は以外にも簡単に片付いた。少女の興味によって。
「うわー。何だこいつら！？おぉ、かわいいな」
リサが興味を示したのは総勢３匹の仔犬。もともと人懐っこい彼らは同類（？）である小さなリサに対して好意的であるようだ。
すっかり変な雰囲気がなくなったところで、漣はリサに声をかけた。
「それじゃあ俺はご飯の準備するんでリサさんは適当にくつろいでください。荷物は２階にある空室を使ってください。」
漣はほとんど聞き流されていると思っていたが、リサはしっかりと聞いていたみたいだ。
「くつろぐのは遠慮なくさせてもらうが、さん付けはなしって言ったろ？敬語もやめてくれよ」
「でも・・・年上に呼び捨てでタメ口は・・・」
漣は砕けた感じがあるが、それでも礼儀はしっかりしているほうだ。たとえ本人にいいといわれても抵抗がある。
「年上って、オレは同い年だぜ？それに明日からはおまえと同じ学校に通うって龍吾が言ってたぞ？」
「えっ？同い年？それに、それいつ言いました！？」
驚きと同様で声が上ずったが、なんとか質問の意味が通じる文章は言えたみたいだ。
「いつって一通り説明したときに言ってたぞ？」
それは聞き逃してもしかたないな、と混乱を理由に切替したが、同時に、あえてそのタイミングで言ったであろう親友に怒りも覚えた。
それにしてもリサが同い年だというのには驚いていた。体自体は小さいものの、龍吾や小菜木に対する口調や堂々とした態度から絶対に年上だと思っていたし、ましてや同い年だとは思いもしなかった。

だが、それを声に出さず心の内にしまうあたり、今日一日で大分成長したと漣はひそかに感じていた。

その後は特にこれといったことは無く、早い時間に寝るのみとなってしまった2人はリビングにいた。何も無かったのは本当で、お決まりの嬉し恥ずかしのドッキリは無かった。

もしこの場を第三者が遠巻きに見たのならば、いちゃついているように見えるが、会話の内容はまったくもって違い、重かった。

「ええと・・・向こうの世界の人間も生まれたときはこっちの世界の人間と大差ないんですね？」

蓮は、龍吾の説明で理解できなかった部分を、何かお礼をしたいと言ってきた律儀な同居人に詳しく聞いていた。全部理解できるかは別として。

「・・・あぁ。だから能力は手術によって手に入れるんだ。一応手術を受けずに一般人として生きることもできるが、普通そんなことはしないだろうな。」

「その手術っていうのは具体的に何をすんです・・・するんだ？」

強引にタメ口に持っていったことに少しいやな目をされたが、あえて無視して答えを求めた。リサも漣の心境が理解できたのか、それ以上は言わずに本題を続けた。

「簡単に言うと脳を開いてある部分に刺激を与える。それによって脳が誤作動を越す。その誤作動が能力ってわけだ。」

「脳を直接ですか？」

少し赤く染まった18禁映像が頭に浮かんだが、振り払うように再び説明を求める。

「おぅ。何時だったかこっちの世界で生きた人間の頭を開いて人体実験をしたときがあるだろ？その実験を聞いた『裏界』の人間がこれの応用で能力をつくれないかって実験をしたところ、うまくい

ったんだ。」
何ともいえない事実に漣は気分が悪くりながらも、疑問点について考えた。自分の知識が正しければその実験が行われたのは大昔ではないはず。となると『裏界』で能力が普及したのは最近なのか。当然の疑問は知識のみでは解決できず、模範解答を三度求めることになった。
「さっきの話からして能力が普及したのは最近か？」
ぎこちないながらも今度は言い直さずに済んだ漣は、眠たそうに犬＜以下：チョコ＞とじゃれあってるリサに質問する。
「そのとおりだぜ。それまでは三大原族が完全に支配する形だったんだ」
蓮は、今の話を聞いてじゃあこっちの世界と『裏界』が繋がったのは何時からからか、と聞こうとした。
しかしやっとリサが寝てることに気付いた漣は変な興奮を起こさず、そのまま毛布を掛けるだけにした。
「この質問は明日でいいや。」
こういうとこは子供だなと独り言をつぶやいた漣に、龍吾たちに聞くという選択肢はなかった。

異変（後書き）

まだ戦いに入れませんでした・・・
がんばって続けていきたいです。

日常（前書き）

受験生の中３が書いた戦い形の話です。
勉強もあって不定期ですが連載していきたいと思います。
初めての投稿なので温かい目で見てください・・・
尚、この物語はフィクションであり、登場する人物、団体などは・・・
＜以下：省略＞

日常

漣や龍吾たちが通う北海道立第四高等学校　＜以下：第四または四校＞　は山の麓にある漣の家からでも徒歩１５分程度でつく位置にある。型にはまった進学校でも、だらけきったヤンキー高校というわけでもない。いたって普通の高校だ。

それでも、活気がないというわけではなく、部活は熱心に取り組んでいる。去年の夏にはサッカー部が県内大会のようなもの　＜以下：全道大会＞　に出場した。

生徒数も多く、少子化の影響をあまり受けていないようだ。

そこのある教室　＜以下：２－Ｂ＞　で２人の男子生徒が騒いでいた。

「昨日はよくもやってくれたね、りょ・う・ご・～？」

「何のことかな、漣？僕にはサッパリだな」

訂正、白々しいにもほどがある言い争いが繰り広げられていた。

きっかけは早朝　〈以下：遅刻ギリギリ〉　近所のクラスメイト　＜以下：柏（かしわ）　陽奈（ひな）＞　に見つかったところからはじめる。

「あっ、漣が彼女と一緒に登校してる・・・」とは陽奈が驚きと同時に発した言葉。

最初はやっかいな幼馴染に見つかっただけだったのが、どういう経緯で伝わったか知らないが、「北山　漣が高校生のコスプレをした小学生に手を出した」という噂になって広まっていた。

ましてやその相手が、同じクラスに転校してきた美少女　＜以下：美幼女＞　となれば全校生徒の興味を誘うのは間違いない。（その時点で噂は嘘だと証明されているのだが）

それを当事者が知ったのは昼休み後半のことで、その後半で言い

争いが起きたというわけだ。
「だから何で僕に当たるんだよ～（笑）」
「そのセリフを吐いている時点で充分悪気があったと思うのだが？」
幸いなことに今この場にリサはいない。早くも教材が渡されるらしく、職員室にいる。もっとも、もしいたのならば噂を否定するために声を張り上げ、さらなる誤解を招いただろうが。
周りの人も2人のケンカには気付いているが、漣の照れ隠しだと勘違いし、一向に止める気配がない。その間にも噂は広がり、結果的にクラス全員が好奇の目線を向けることになった。
だが、流石に自分にも責任があるだろうと思った陽奈が、もう一人の幼馴染　＜以下：大野　　春香＞　と一緒に止めに入ったところでようやく収集がつきそうだ。
「ほら、2人共いい加減にして。やり過ぎだよ？」
噂の発信源だと思われる張本人は呆れた顔で仲裁に入る。
それに合わせて、口数の少ない幼馴染も珍しく争いごとに首を出す。
「これ以上やると。余計誤解を招く。三城君も陽奈の言うとおりやり過ぎ。これぐらいにしとくといい。」
正論を言われ、理論の面で反抗できなくなった2人は渋々引いた。
学級代表に注意され、静かになった教室に興味本位で見る視線はもう無くなった。B組が真面目なクラスだからすぐ静まったのではなく、　春香が注意したから静まったのだ。
普段からポーカーフェイスを保ち常日頃冷静な彼女の判断は、同学年だけでなく他学年からも信頼されている。表立って指示することはあまりないが、適切な状況判断は龍吾　＜以下：言い訳や切替、頭の回転がうまい男＞　以上であるため上級生も評価せざるを得ない。
そのことを、クラスメイトは1年かけてちゃんと理解した。
異様な様子で静まりかえった教室に入ってきたりさと小菜木　＜

以下：りさの荷物持ち＞　は、首を傾けるので精一杯だった。

時を同じくして、大通りの地下街に外国人がいた。
外国人というだけならあまり目立たないのだが、一人は白いマントで体全体を隠すように覆い、赤い髪を完全にオールバック。もう一人は黒いロングコートを羽織った黒髪の女性。冬場に秘書と言われれば納得するような雰囲気と体系　＜以下：グラマー＞　だった。
そんな季節外れの二人組みは当然のごとく人目を引く。
「リンナよ、人々が我々を凝視してると思うのだが、気のせいか？」
リンナと呼ばれた女性は、メガネをあげながら呟く。
「それは司祭が用意したこの服が原因です」
「バカな、我は亜寒帯に適した服装を選んだはずだが！？」
思考を練るまもなく返した答えに女性は動じず、いつも通りだなと歩を進めた。
違和感のある方向へ。

時間は変わって放課後。「俺たちはいとこだから、面倒見るのを転校初日だけ頼まれたんだ」と苦し紛れの言い訳でクラスメイトから逃げてきた４人は昨日の戦闘場所へ向かっていた。無論、言い訳がとおったのは龍吾と小菜木の手助けがあったおかげだが。
「ところで、今日は何をするんだ？」
「今日は漣君が何なのかを調べるんだよ」
当然の疑問に、小菜木が揺れる部分の少ない髪を揺らしながら、間髪入れずに答える。そこに、足りない分を龍吾が補足した。
「能力の分析ができる人を呼んで、詳しく調べてもらうことにし

たんだけど、りささんから聞いてないの？」
さん付けのところに隣が反応したが、諦めたふうに必要なことだけ答える。
「それ決めたの今日だから、オレじゃなくて龍吾が伝えりゃいいじゃん。っつか誰来んの？“解素（かいそ）”の奴か？それとも“単分（たんぶ）”？」
「いえ、新人みたいですよ。」
急な　＜以下：誤魔化した＞　話題転換は、漣の質疑を生み出し、長々とした説明も生み出した。
「カイソにタンブって変な名前だな～。」
「２つとも『術名（じゅつな）』のことだけど．．．これこそりさちゃんは言ってないの？」
小菜木のリアクションは「？」を「！」に変えてもいいくらいのものだった。
「あぁ。聞かれてないからな。」
白状だなと肩をすくめたのは龍吾だけで、残りは切り替えて解説を始めた。
「『術名』っていうのは各個人の能力の名前。大体はその場にいる研究者つけるんだ。簡単に言うと、第二の名前かな？」
「じゃあ小菜木も持ってるのか。」
「おぅ。オレには“両道（りょうどう）”ってのがある」
今度は聞かれてない（？）りさが即答した。
りさの回答に龍吾と小菜木は少し躊躇ったが、隠す必要もないと思ったのか龍吾も続いた。実際にかかった時間は１秒にも満たないだから漣は気付いていないが。
「僕は“空換（くうかん）”の能力。小菜木は．．．」
「私は“創樹（そうじゅ）”ってゆう能力がね」
漣は相槌をうつだけで、それっきり黙り込んでしまった。正確には黙らされたのだが。
小菜木の造った重苦しい雰囲気に。

四校に食堂はない。今の時代学食のあるほうが少ないのだが。したがって昼は弁当か校外ですますことになる。
その法則で常連となった6人はハンバーガーショップに陣取っていた。
昨日は結局新人が来なく、漣の分析は後回しとなった。（漣に詳しい事情　＜以下：三大原族の可能性を訴えても、早急に手を打つ必要がないという理由で本部のほうで後回しにされた＞　は聞かされてない）
尚、向こうも忙しいから急にはこれない、というのが龍吾の言い分。
すぐ解散した夕方にまだ重苦しい雰囲気はあったものの、朝にはすっかりなくなっていた。小菜木の胸中にはまだ残っていたが。
それた話題を元に戻すが、今はハンバーガーショップの中。四人掛けのテーブルを2つ並べて、雑談をしていた。
今回の内容は高校生にふさわしい恋愛ものだ。どの話題からそうなったかは知らないが、漣が覚えてる限りでは先輩の話だった気がする。（ちなみに漣とりさの話題はいじられ過ぎてネタが無くなった）
「そういえば龍吾と小菜木っていつから付き合ってるの？」
陽奈の話題転換は小菜木だけでなく漣までもを驚かせた。（文脈から察するとおり龍吾は驚いてない）
「高校入ってから・・・だよな？」
「う、うん。」
龍吾の助け舟に小菜木がのる、いつも（？）のパターンだ。
「っでどこまでいったの？」
言葉には出さなかったが漣にも興味はあった。この手の話は龍吾たちから一度も言われてないからだ。
だが、プライバシーを守る気持ちは優等生が持っていた。

「結。答えたくなかったら別にいい。」
「あ、春香ありがとう」
「じゃあこの話題はこれで終わりでいいですね？」
頷くかそうでないかの違いはあったものの、全員が同意したのには変わりなかった。

時を同じくして、コンビニの屋上に地下街にいた外国人がいた。
白いマントの男はパンを片手に、もう一方の手に野菜ジュースを持っていた。パンがサラダパンのところを見ると健康に気をつけているようだ。少なくとも食事は。もう一人はコーヒーを片手に持つだけだった。
「リンナよ、違和感は感じるか？」
「感じはしますが・・・少し奇妙ですね。数が３つ。奇数です。」
男は目を閉じて、思考を始める。数秒で目を開けたが、疑問は残ったままのようだ。
「どうゆうことだ？」
「行ってみなければありませんが、数は脅威とならないでしょう。一筋縄でいかないかもしれませんが。」
男は頷き食事を再開する。
味わうためでなく、栄養を取るために。

今更容姿を紹介するのはどうかと思うが陽奈や春香、小菜木、りさ　＜以下：いつものメンバー＞　は美少女の部類に入る。スタイルやタイプに違いはあるものの学年でもランキング上位を占めている。（ランキングの存在は男子しか知らないが）
そんな少女たちを連れている（？）漣と龍吾は当然のごとく嫉妬

の視線の的になる。今日も昼休みの帰りに被害にあった。
しかし、龍吾と小菜木は周りが認める中なので、必然的に恨みは漣一人が買うことになる。物理攻撃にはしる輩がいないだけまだましだが。
その物理攻撃に出ないのは理由があった。陽奈と春香は幼馴染、りさはいとことということでしかたなく漣と一緒にいて、別に好意は持っていないと周囲が思っているからだ。好意を持っていないのならば漣が告白して振られればいいというのもまた暗黙のルール。
だがそれはあくまでも周囲の意見。当事者たちの本心は含まれていない。
そのある当事者の想いは揺れていた。一人の転校生　＜以下：建前上のいとこ＞　の登場によって。

ポニーテールの髪を解いた陽奈の頭は枕の中、体はベットの上にあった。
うつ伏せの体制で今日のことを振り返る。
「また聞けなかったな・・・」
聞けなかったのは漣とりさの関係。
同じ幼馴染にも差はあり、春香より陽奈のほうが近い関係にある。物理的にも、それ以外でも。
幼稚園のころから一緒だった陽奈には漣の嘘がわかっていた。
陽奈が知っている漣の両親の兄弟は、父方の未婚の兄だけ。知っていると言ってもこれが全員だが。
いとこができるようなことはない。ましてや同年代なんて。
陽奈は何故漣が嘘をついたのか知りたかった。
本当に漣とりさが恋人同士なのか。
だが聞けなかった。
聞いてしまったら今までの関係が、これまで築いてきた信頼がな

くなってしまうような気がして。
胸のうちにしまっている気持ちを、ずっと伝えたかった想いを抑えられなくなるような気がして。
だから親友にメールを送ることしかできなかった。
『嫉妬・・・してるのかな？』

場所は北山家リビング、時は亥の刻　＜以下：１０時ごろ＞　。
デジャブのような状況で、またも質疑応答が繰り返されていた。
「龍吾と小菜木が『クンベル』ですか？」
「あぁ。確か６歳ぐらいのときからじゃないかな？」
聞いたばかりの話だが、『クンベル』とは簡単に言うと相棒とかパートナーということらしい。永久のという単語がついてくるが。
「だからほとんど一緒にいるんだな。」
りさの説明はこうだ。こっちの世界にいる異能者は基本的に二人一組の体制　＜以下：クンベル＞　をとっている。（りさは例外だと前置きしていた）組んだ二人が同性であれば親友か兄弟　＜以下：姉妹＞　、異性であれば夫婦か恋人となる。そうして、どちらかが死ぬまで半永久的に『クンベル』となるということだ。
龍吾と小菜木の場合は高校生ということもあって恋人となっているらしい。つまり、昼の言い訳は半分ホント、半分ウソということだ。
「それじゃあ龍吾と小菜木はその・・・本人たちの意思に関係なく婚約者になってるってことですか？」
漣の質問には、予想に反した答えだけが首だけで返された。
「いゃ。規則的に縛られてはいるけど実際に結婚を前提とした付き合いをしてるのは本当だぜ」
予想外の答えが返ってきて、漣は驚くと同時に思考を始めた。そのせいで顔を傾けたりさに気付かなかなかったが。

漣は同年代の友達が将来のことを考えながら生きていることに、自分はどうなのかと思った。
高校に入ったのも単に家が近いだけで、何か特別な目標があるわけではない。
ならばこっちの世界ではなく、裏界で何かできないか。自分にしかできないことはないか。
そう経験の少ない頭で考えてもでない答えを打ち切って、目線を戻すとりさが居眠りをしていた。もう一つのデジャブを感じながらため息がまた闇に消える。

時間は少し巻き戻るが、場所は春香の部屋。
部屋に唯一あるぬいぐるみ　＜以下：陽奈からのプレゼント＞を抱いた春香が勉強机に向かっていた。だが机に向かっているといっても勉強してるわけではなく、携帯をいじっている。尚、春香が勉強嫌いなわけではなく、陽奈のメールに返信してるだけだ。
「ふう・・・」
本日何回目か判らないため息は、解決の難しさを物語っていた。
相談の内容は「何故漣が嘘をついているか」。
春香には感情的な相談はできないと思った陽奈の適切な内容だった。
しかし、春香も万能なわけではなく、返事に困っていた。（陽奈には明日メールすると連絡した）
春香は考える。何故漣君が嘘を付いたのか。嘘を付いたのはりさんとの本当の関係を知られたくないから。三城君と小菜木さんも嘘を付いたのは本当の関係を知られると2人も困るから。
となると秘密は4人共通のものとなる。それ以上の解明にはいかなかった。
更にもう一つ疑問があった。

りささんの素性がまったく解からないのだ。実家の力を使っても、どこの高校にいたかぐらいしかわからず、捜査が進まない。
本当の意味で謎だらけだった。
さすがの春香も手詰まりで、眠気に身を委ねる形になった。

時を同じくして、ホテルの部屋にコンビニの屋上にいた、地下街にいた外国人がいた。
「司祭、違和感の場所を地図に示しました。」
白いマントの男が持つ携帯　＜以下：二つ折りでないもの＞　に地図が送られた。赤い座標つきで。
「ここが寝床で間違いないな。」
「はい。」
黒いコートをハンガーにかけた女性が頷き、沈黙が流れる。
「明日の晩、ここに行く。手古摺ることも考え、今日は休め」
男が踵を返し、ベットに向かう。女性も反対側のベットへ。
男と女が密室で二人っきりなのに、浮ついた空気が入り込む隙間は一切なかった。

日常（後書き）

次こそ戦闘にいってきます（敬礼）

交錯（前書き）

受験生の中３が書いた戦い形の話です。
勉強もあって不定期ですが連載していきたいと思います。
初めての投稿なので温かい目で見てください・・・
尚、この物語はフィクションであり、登場する人物、団体などは・・・
＜以下：省略＞

交錯

夏休みは学生　＜以下：受験生以外の学生＞　にとって数少ない休み。学業に追われず、のびのびと過ごすことができる。夏休みの宿題　＜以下：足枷＞　があるものの、それでも普段よりは気楽でいれる。

だが、幸福の前に試練があるのは世の定め。

学生にとって試練とは試験。即ち定期試験。

ここ四校でも赤点以下は当然のごとく（？）夏休みの補習がある。夏休みを満喫して遊ぶためには補習なんてやってられない。

それ故、余裕のない生徒は躍起になって勉強をしていた。

身についているかは別として。

りさは転入から一週間しか経っていないが、完全に打ち解けていた。いろんな女子や男子と仲良くなり、クラスの人気者、有名人となっていたが、いつもの5人　＜以下：漣、龍吾、小菜木、陽菜、春香＞　と一緒にいることが多かった。圧倒的に。

その6人は1時限目　＜以下：自習＞　、何気ない話で盛り上がってた。小さな子　＜以下：児＞　は机の上、気障な野郎は自席、モテモテな（？）男はその前の席、残りは周りに陣取り直したところで陽奈が口を開いた。

「ねえ春香、勉強教えて。」

真剣な目をした発言に当の春香以外は目を丸くして驚いた。（1名は場に合わせた演技かもしれないが）

陽奈が勉強嫌いなのは全員が知っている。授業中も外を見るか寝るくらいでノートも春香のを写す程度。成績にいたっては体育以外目の開けられないようなもの。典型的な遊び人だった。

そんな陽奈がいきなり勉強に対して前向きになったのだ。驚いて当然だった。尚、実際には授業の途中から頭を抱えて唸ってたという前振りがあし、こんなことを言うのも初めてというわけではない。漣たちが毎回驚いているだけだ。

「いいよ。漣君もまた教えてあげようか？」

「じゃあ、お願いするかな。」

漣の成績もあまりよろしくない。見積もっても中の中程度だ。その見積もった成績も、春香の指導があってのもので、高校に入れたのもギリギリだった。（余談だが、陽奈は運動神経が桁外れだったので学力関係なしの推薦だ）

それ故に、２人は小学校から春香に勉強を見てもらってる。（再び余談だが、春香は教えるのがうまく、他のクラスメイト　＜以下：女子のみ＞　からも依頼を受けることがある）

普段ならこのまま場所の設定となるところで乱入者が入ってきた。乱入者は足りない身長差を補った漣の隣の机から会話に入る。

「なぁ。オレも混ぜてもらっていいか？」

この質問には本当の意味で驚いた。例えるならば隣同士で目を合わせる程度にだ。現実にやっているので例えではないが。

「いいけど。平野さんはどうして？」

春香が「一同代表」の前置詞が付く質問を平野　＜以下：りさがこの学校に入学するためつけた偽名＞　りさに投げかけた。りさの成績は皆が良いと思っている。点数の上位者が発表される数学では、いつも名前が上がっているからだ。

「オレは完全な理数系だからな。文系はちょっと・・・。」

叱られた子供みたくさらに小さくなったりさは、申し訳なさそうに言った。誤解が作った雰囲気が場を支配する。漣たちは自分がいじめたみたいな感覚で言葉を失っている。

そんな中、何故かバツの悪いところにさすがと言うべきか、助け舟がやってきた。

「それなら僕たちもいいかな？僕と結の成績なら教える側に回れ

ると思うし。」
話題転換は空気を変え、明るい方へと持っていった。（三度余談だが、いつも龍吾は結に付きっきりで教えてる）
小菜木も龍吾の隣で賛成の意を示している。
「全員で勉強会か～。けっこう楽しそうだね。」
「楽しむのはいいけど、しっかり勉強しなきゃ駄目だから。」
顔で話を振られた春香は、的確に釘を刺していた。その結果、陽奈も小さくなる。りさほど時間も長く、小さくはなかったが。
それでも確認をそつなくこなす春香は、流石学年首席といったところだ。
「結局。場所は漣の家でいいの？」
つい最近　＜以下：りさが来たとき＞　まで勉強会は漣の家で行われていた。
家は広いし、２人の家の真ん中にある。漣も断る理由は無かった。
語尾が過去形なのは現在がそうでないからだ。
今漣の家にはりさが住んでる。結の家が冗談でなく本当にりさを迎えられなくなったからだ。
そして、そのことは裏界を知るもの以外に秘密となっている。
詰まるところ、陽奈たちを呼ぶことができないのだ。当然、今回は断らなければならない。
「悪い、家はちょっと・・・」
「なんで？」
こちらもこちらで当然の疑問。
予想はしてたけど理由がうまく見つからない。こういう誤魔化しは漣の苦手分野だ。
斯くなる上は親友へのアイコンタクト、とは今の漣の心境だろう。
「まあ、それ以上は聞かないようにしましょう。漣にも一応プライバシーはあるのですから。」
一応ってなんだ一応って、も今の心境。
だが、それを口に出すほど子供ではない。冷静に時（？）が解決

するのを待つ。
「で、でも・・・気になる。」
さすがの龍吾も隠しきれないか、と結も心配したところに龍吾が爆弾投下。
「聞かないほうがいいですよ。今、漣は小学生によるハーレムをフィギュアで作っているんです。だから、女の子を家に連れ込んで・・・。」
「おいコラ龍吾。誰が児童ポルノ法だ！」
「いや、そこまで言ってないって。」
高校生も、本音を口に出すほどの子供だった。

家のことを曖昧にし、陽奈の家が会場となった勉強会を前に、済みきった黒髪の美少女が屋上にいた。
悩んでため息を吐くところも見方によっては絵になるが、屋上には春香一人だけ。第三者的な視線はないようだ。
実際には塔屋の裏にいるのが春香だけで、反対側には誰かいるのかもしれないが。
今の時間は昼休み。
今日は三城君の用事があるということで6人そろっての食事は無しになった。陽奈も提出間際の課題があったので、春香一人で食べてる。
だが、それもよかったようだ。４人の関係について考えることができたので。
春香は昨日の続きを考える。
今日も新たなヒントを得ることができた。
漣君には家に入れたくない理由がある。それが新たな情報。確信はないがおそらくりささんが住んでいるからだろう。と、ここまでは予想できたのだがその後が進まない。

何故りささんが漣君の家に住んでいるのか。何故その理由を隠し通しているのか。何故三城君と小菜木さんも知っているのか。何故協力してるのか。

謎は山積みのままだった。

わかるのは４人はまったく話す気がないこと。これは確実だった。

それならこちらが動かなければならない。陽奈のためにも。

強行手段はとらずに。

そう決心したが、思考はここでストップした。

陽奈が後ろから肩をたたいたからだ。

「早く終わったから来ちゃった。」

早く終わったって事は手を抜いたのか、とは野暮な質問。口に出さぬが吉となるようだ。もっとも、口に出そうとしても口に出すことはできなかった。

陽奈が真剣な話をしたからだ。

長年の付き合いが陽奈の気配を感じ取る。異能がなくても春香にははっきり分かる。

次に何を言うのかも。

「ウチ、今日漣に聞くよ。りさちゃんとはどんな関係なのか。ちゃんと目を見て。」

春香は胸の奥で鈍感な幼馴染を罵倒する。

同時に答えの分かってる質問もする。

「・・・手伝う？」

「いいよ。ウチが、自分一人でやる。」

『フォローぐらいさせてくれてもいいのに』

声にならない思いが喉の奥に引っかかる。

いつも大切なことは一人でやってしまう幼馴染を、控えめな幼馴染は、また止められなかった。

時は変わって午後7時５０分。
陽奈の部活終了３０分後に設定された集合時間まであと少しだ。
漣の家からでもそろそろ出ないと遅刻になるだろう。
「りさ、準備できたか？」
「おぅ。」
すっかり慣れたタメ口で確認し合った2人は戸締りをして歩き出す。
りさは白のショートパンツに黄色いＴシャツ。ファッションに詳しくない　＜以下：いつもりさを見ている＞　漣には何がなんだかわからない。（一応、ブランド物なのは聞いている）
対して漣は灰色のジーンズに赤いチェックのパーカー。
りさと並ぶと季節違いかと問いたくなるくらいだ。無論、漣の方が。
そんな2人が家の敷地を出て、道路に出たところで、
六角形呪縛がリサを取り囲み、一気に中心へ収束した。

怪しげな光に縛られる前に、一歩引くことで回避したリサの目は今まで見たことのないものになっていた。
その目は獲物を探すような目で何かを探す。
動いた目線は一瞬で留まり、前方へと向けられた。
「リンナの“六束（むそく）”をかわすとは、“両道”の名は伊達ではないのだな。」
全身を覆う白いマントに赤髪のオールバック。声の主であろう中年の男は、正面の家の屋根にいた。日本人とは思えない顔立ちは白人系統だろう。顔は笑っているのに目が笑っていない。その目からはリサと同じ殺気が漏れ出している。
傍らにはクンベルであろう女性がいた。夜のせいではっきりとは見えないものの、２０代後半ぐらいだと予想ができる。漆黒のロングコートは闘いの開始を告げた本人を隠していた。

「“天罪(てんざい)”の・・・ミカド！！」
リサのほうは驚きを隠せず、術名と名前で声を張り上げるのが精一杯だった。
「何故ここに・・・。」
「貴様を消すために決まっているだろう？」
それは決戦の合図だった。

ここは陽奈の家。一足早く呼ばれた春香は陽奈と二人でリビングにいた。
決意を決め、想いを伝えるためにいる陽奈は、平常心を保とうとしている。
だが、それは逆に緊張に輪をかけていた。肩に力が入り、手は震え、表情は面と向かう前から硬くなっている。
春香はすべてを見た上で行動に出る。
向かいのソファから陽奈の前に歩み寄った。距離にして1メートル弱、時間にいたっては数秒の短い空間が長く感じられる。
そのまま陽奈を胸の中に入れた。
陽奈は目を閉じたまま動かない。
そして、想いの伝えられない幼馴染へ、届かない幼馴染へ、可哀想な幼馴染へ言葉をかける。
「大丈夫。」
待たされ続けた少女達は今日もけっして来ない少年を待つ。

現在の裏界には人間を支配しようとする団体がある。
その理想を叶える為には反対勢力を抑えることが必要だった。
今では世界各地で戦闘が行われている。

ここ北海道でも始まっていた。
武力派　＜以下：ミカドとリンナ＞　と反対派　＜以下：リサ＞
の闘いが。

リサは家の塀の陰に隠れ、手を胸の前で合わせて力を込める。力の象徴である光が輝き、開いた手の内から無数の妖精が飛び出した。掌程度の妖精は背中に羽を生やしている。
これがリサの使える２つの能力の１つ、創り出した妖精と視界をリンクさせる“目示（もくじ）”だった。
散らばっていった妖精は、情報のネットワークを作り、リサへと送り出す。送り込まれた情報を強化された演算能力で処理し、状況を掴み取った。
敵の数は２人。“天罪”と“六束”。“天罪”の能力は知っているが、“六束”の方は知らない。
そのため、推測にしかならないが、おそらくは相手の能力を無力化させる能力。先程作り出された六角形の呪縛により封印するものだろう。
対戦時における重要な分析を混乱した頭でやってのけたリサは、発動条件までもを推測していた。
術の発生から完了までは１秒ほど。逃げ道を予想されない限り、かわすのは難しくない。それに、呪縛を作る為には相手を視界にとらえなくてはならないようだ。現にさっきの力は妖精のほうに向けられている。
つまり、死角から攻撃すれば問題はない。
だが、厄介なのは“天罪”のほうだ。“天罪”、天に逆らうものへの罪。これが術名の由来。その能力は身体に直接作用し、今までしてきた罪の分だけダメージを与える。
効果範囲は拳だけだが、何人もの人を殺し、大きな罪を犯してい

る裏界の人間にとっては脅威となっていた。
要約すると、相手の拳に一度も触れずに戦闘不能へ追い込めということだ。
あらゆる武術を習得しているミカドは接近戦を得意としている。一発も喰らわずに攻撃を仕掛けるのは不可能だ。
かといって、遠距離攻撃はリンナに通用しない。
片方だけでも脅威だった2人が手を組んだ状態は、無敵といっても誇大ではなかった。
そんな二人組みは漣に目もくれず、リサの居場所へ歩き出す。
対してリサは、塀から飛び出し距離をとる。
視角に入った瞬間にリンナが数多の呪縛を作り出し、ミカドは接近戦に持ち込もうとしていたが、リサは後ろに跳び、退いた。
一歩間違えれば捉えられるような状況で、平然と紙一重の攻防を繰り広げる。
否、平然と見えるだけだ。本当はギリギリだった。
避け続けることができるのは、妖精から送られている僅かな動きを分析しているから。些細な様子を観察し、常に集中するのは相当な労力を使い、精神面ではすでに圧倒されている。
必死に猛攻から逃れ、追い詰められているリサは妖精の急激な減少を感じた。
リンナが妖精を集中攻撃し、視覚から得られる情報を減らしていたからだ。手がかりの少なくなったリサは、ミカドの速攻を防ぎきれなくなる。
まだ一撃を喰らっていないだけマシだったが、今回は完全に追い詰められた。
精神的にではなく物理的に。
逃げ道のない一本道に2人となったミカドとリサは牽制し合いながらも、距離を縮めていた。その距離十メートル。ミカドは一歩一歩慎重に近づき、手の届く寸前までやってきた。
最後にミカドは問う。

「残したい言葉はあるかい？」
余裕の笑み。そう呼ぶにふさわしい微笑を浮かべ座り込むリサを見下す。
それに対する答えは。
“空喚”と“創樹”の２人が返していた。

敗中（前書き）

受験生の中3が書いた戦い形の話です。
勉強もあって不定期ですが連載していきたいと思います。
初めての投稿なので温かい目で見てください・・・
尚、この物語はフィクションであり、登場する人物、団体などは・・・
＜以下：省略＞

敗中

能力の発動が脳の誤作動であると同時にこっちの世界での誤作動でもある。

現実的にありえない現象　＜以下：誤作動＞　は違和感を生み出す。

違和感に慣れた異能者は違和感を感じることができる。感じる鋭さに個人差はあるが。

能力を1度使えば、3日間程度は違和感を発し続ける。

つまり、1km単位であれば居場所を特定することができるということだ。リアルタイムで。

ミカドは動揺していた。

彼もリンナほどではないが、鋭敏な感覚を持っている。長年の感覚が衰えてなければ（違和感を感じる鋭さが衰えるということはないが）残りの2人はかなり離れた場所にいるはずだった。正確な距離は解からなかったが、少なくとも一瞬で辿り着ける位置にはいなかった。

その2人が今、目の前で戦闘体勢に入っている。大きな能力の発動を準備した状態で。

「悪い、遺言を聞く時間はないようだ。」

「わたし達のこと恨まないでね？」

リュウゴは拳を握らずに掌で、ユイにいたっては攻撃の姿勢すら見せずにミカドを吹き飛ばした。ミカドも大男とは言えないものの、押しただけでは吹き飛びそうにない。ユイは地面　＜以下：コンクリート＞　から樹木を生やしているので、異能で吹き飛ばしているのだろうと予測できるが、リュウゴは、傍からみると体術で反撃し

てるようだ。
ピンポン玉のように飛んでいった体は、数十メートル先の一軒家にめり込んでいた。
一般的な人間であれば即死しそうな衝撃にも、体を鍛えたミカドは立ち上がる。
だが、平気とまではいかないようだ。リュウゴに突かれた左の脇腹を押さえている。その隣ではリンナが心配そうな表情で話しかけていた。（リサたちの前に来てからリンナが表情を変えたのはこれが最初）
「どうやら一撃必殺とはいかなかったようだね。」
リュウゴは緊迫を保ったまま、ではなくいつもの笑みで話しかけた。場違いではあったが、リサが何も言わないところ、これがリュウゴの戦闘スタイルなのだろう。
「わたしの“創樹”があいつの能力で相殺したみたい。突発的にあんなに大きな力を使えるなんて、いったい何者？」
リンナの持つの“創樹”は木を創造する能力。形を槍にすれば貫通力が生まれ、盾にすれば防御力が生まれる。さっきは太めの樹木を作り、押し出すようにミカドを狙った。
しかし、手応えはなかった。ダメージを喰らったのはリュウゴの一発だけ。ミカドは右腕でユイの攻撃を防いだようだ。反射的に攻撃対象をユイとし、迎え撃つ。ミカドはあくまでもユイを狙うつもりで攻撃　＜以下：防御＞　したため、ユイが今まで犯した罪の分が反映されたのだ。結果、ユイの重撃を打ち消すほどの威力となった。
「あれが噂の“天罪”のミカドだぜ。」
ミカドと同じく立ち上がったリサは2人の後ろから話しかける。ショートパンツを手で払いながら冷静に説明していた。
「“天罪”って十年くらい前に死んでなかったっけ？」
「いや、クンベルが死んだだけで、“天罪”自体は死んでなかったらしいよ。」

リュウゴの回答にユイが頷く。効果音は「ふーん」だ。
「対策としては・・・遠距離攻撃かな？」
噂になるほどの実力者は弱点が広まり、対策も練られる。ユイが言ったのはリュウゴから聞いた対応手段で、一番妥当なものだった。
「おっと。そのセオリーは通用しねーぜ。クンベルのほうが無効化してくる。厄介なペアだぁ。」
リサの苦戦が窺える表情はリュウゴにまで伝染していた。肩をすくめるのをプラスして。

“六束”の能力も説明し終えたリサは再び妖精を創り出していた。その数は減少しているものの、まだ目で数えられるほどの量ではない。
異能の発動には精神力も必要とするので、これだけ出せればかなりの力量といえる。
それ故、この量にはミカドたちも驚いていた。
「さすがは、“両道”。『一匹狼（インベンデンス）』と呼ばれることはありますね。」
初めて口を開いたリンナは、呟きながら顔をリサ達に向ける。
その後、視線はミカドへ。体ごと向き直し、正面に立った　＜以下：3人に背を向けた＞　。
「司祭。3分凌いでいただけますかますか？」
「もう、策ができたのか？いや、できたんだな。・・・　3分だ。それ以上は待てないぞ。」
途中でため息を入れたミカドは、気合を入れなおすように拳　＜以下：殺人兵器＞　を握る。
リンナは礼をし、ミカドの背後へ駆け出した。
気の抜けない闘いの再開まであと少し。

弱ったミカドとの距離を詰めていたリュウゴは、リンナが走り出したのを見た。
体は無意識に追いかけるのを始めている。他の2人と一緒に。
しかし、腑に落ちない点があった。手負いのミカドがリンナから一定の距離を保って背走しているのだ。
逃げるのだとしたら後を向かずに全力で走るか、2人とも敵を向いて、能力使用しながら走るのが主流。リンナのみ逃がすならまだしも、ミカドがついていってるところ、それはない。
中途半端なら逆に捕まる。それを知らない2人ではないのだから、何か策があるはずだ。（ミカド達の会話はリュウゴたちに聞こえてない）
急ぎながらも思考はしっかり落ち着いていた。ここまでのことが考えられたのだから。
顔を向けると、隣を走るリサとユイも同じことを考えているように見える。
「一回遠距離で仕掛けて、ミカドを引き離しましょう。ユイはミカドに直撃させるように、リサさんは2人の間に障害物を。」
「わかったよ。」
「おぅ。」
それぞれ頷き、攻撃準備に入った。といっても、2人とも構えてはいないが。
ユイの足元から樹木が伸び、ミカドを狙う。今度ばかりは、攻撃対象をユイとして能力を発動できなかった。（距離的な問題で）必然的にかわすしかない。かわすこと自体は難しくないが、そうなると距離が開く　＜以下：リュウゴ達との距離が縮まる＞　。引き離すのには十分だった。
だが、ミカドはかわすという選択肢を選ばなかった。伸ばした樹木を踏み台にして高く飛び、リサの移動させた家をすれすれ越える。

異能者がいくら体を強化してるとはいえ、出来過ぎな跳躍力だった。
「一歩間違えりゃ、勢いよく木か家ぶつかって大ダメージだぜ。どうして無理する必要がある？」
「リンナから離れられない理由があるってことじゃないの？」
声にこそ出してなかったものの、リュウゴも同じ疑問を持っていた。
何故別々になってはいけないのか。
確かに1対3になれば不利だが、リンナの能力は視界に入っていれば一撃必殺。能力を封じられては、異能者も少し身体能力の高い人間に過ぎないので、ある意味でミカドより一発は重かった。
ミカドに集中してる間に廻りこまれる可能性を考えると、その場でかわすより飛び越えて速度を保つ方が不利。
無理する理由はないはずなのだが。
リュウゴは長く考えず、どうせ解らないなら、強引に引き離して作戦を失敗させるしかない、と思う。
結果、やることは変わらなかった。

リサに指示され、漣は屋根の上にいた。
裏界の存在は知っていても何もできない漣は、遠く離れた場所から観戦　＜以下：観察＞　している。
また一つ、突然家が移動した。
「いくら治せるからって、派手にやり過ぎだろ。ってにしても、あれが“移変（いへん）”か。」
漣はリサの能力を聞いていた。
物体を瞬間移動させる能力。それが“移変”。
自身を移動できない。自分の3分以内に直接見たものしか移動できない。近くの位置にしか移動できない。といったいろいろな条件があるものの、もう一つの能力“目示”と合わせると強さを発揮し

ていた。
妖精の見たものも直接見たことになり、移動できる対象になる。近くの位置にしか移動できないのも、妖精の近くには移動できるのでカバーできる。
とある事情で能力の2つ使えるリサにとって好都合な能力の組み合わせだった。
家を発現させたのも、リュウゴ達が登場したのもこの2つの能力があったから。
一見戦闘向きでないようだが、相手の頭上に超重量のものを出したり、頑丈なものを盾にしたりと、十分に戦うことができる。
いつか自分もあの場所に立つのかと考えていると、不安と期待の両方が胸にこみ上げてきた。
少し子供っぽいかもしれないが、漣はバトル系が好きだった。主人公はいつも負けない。正義の味方もそう。
だから彼はリサの勝利を疑っていなかった。
「今日はリサの好きな肉にしといてやるかな。」

漣の期待とは反対に、戦場　＜以下：憧れの場所＞　は緊迫した状況になっていた。
どんなに引き離そうとしてもミカドがついてる。
今までとは桁違いな集中力と反射神経。リンナに攻撃は届かず、ミカドは倒れない。
リュウゴの能力が遠距離に向かなく、リサとユイだけで攻撃してるとはいえ長引きすぎていた。
その間にミカドは攻撃せず、防御のみ。もともと“天罪”は強攻型だ。その上リンナは走り始めてから能力を使っていない。防御の不向きな相手に逃げられ続けて、3人は焦りだしていた。
「リュウゴ、次はどうする？・・・おぃ。リュウゴ、聞いてんの

か！」
そんな中、リュウゴは情報を再び整理していた。
自分の地理勘が正しければ、さっきからここら一帯を回っている。
このまま進むと、最初の戦闘場所に戻りそうだ。
「リサちゃん、２人で攻撃してよう。リュウゴは何か考えてるんだよ。」
最初の場所に戻るなら何故走る必要があった。
この短い時間で変わった事実。それを考える。
答えはすぐに出た。時間と移動。ようやくたどり着いたいやな予感が脳内を駆け巡ると同時に大音量で叫んでいた。
「あいつらの狙いは時間稼ぎと準備だ！もうすぐ大きいのがくるぞ！」
だが、気付くのが遅かった。
次の瞬間リンナが振り向き、こちらに向かって手を掲げる。
広げた手とリンクするかのように巨大な呪縛が、よくある魔方陣のように地面へ現れた。それに連動して空中にも同じ大きさのものが作られる。
これが真ん中に凝縮して効果が発動するまで１秒弱。人力で逃げ出すのは無理だった。
「リュウゴ、ユイ。飛ばすぞ！」
だからリサの寸時の判断は正しかった。普通なら。
リサが飛ばしたリュウゴとユイの飛んだ先　＜以下：妖精の近く＞　にも同じ呪縛が張られていた。
収縮しかけた仕掛けは止まらない。移動した２人を呪縛は完全に仕留めた。

自分を取り囲んだ呪縛が発動せずに消え、無事だとわかったリサは、すぐに２人を飛ばした場所に向かった。それほど遠くない場所

に飛ばしたので移動に難はない。
着いた瞬間目に入ったのは2人の体。リュウゴやユイの腕　＜以下：手首＞　には妖しげな菫色の光が、暗い雰囲気と共に纏わり付いていた。“六束”の効果なのは見たことがなくてもわかった。
何があったんだと目で聞いた、わけではないがリュウゴが答えるように口を開く。
「リサさんの飛ばしたすぐ近くに別の呪縛があったんです。それで・・・。」
口数の多いリュウゴですら言葉が濁り、ユイは下を向いたままだ。
「リサさんは大丈夫だったんですか？」
「あぁ。あっちの呪縛は出現しただけで、発動することなく消滅した。よく考えれば、あんなのを同時に使うのは無理だ。最初っからダミーだったんだろう。」
自分の責任だと言わんばかりに小さな拳を握り締め俯くリサの姿は、敗戦を物語っていた。
「それで、“天罪”たちは・・・。」
「逃げたよ。今度は全力で。明日もっかい来るって言ってた。」
自分たちの力を抑えられ、相手に撤退を許す。今回は『完全な敗北』の言葉がよく似合った。

漣はリビングにいた。
少し前に闘いの音が消えて静まり返ったので、家の中にいることにしたのだ。おそらく戦闘はおわっているだろう。
リサやリュウゴ、ユイの力は強大だと聞いている。よほどのことがない限り負けないとも。
そのため漣は何から聞こうかと思っていた。楽しい雑談になることを前提に考えて。
そして3人が帰ってきた。鍵を開ける音と、足音が聞こえる。

「おかえり、どう・・・だ・・・った。」
漣はそこで口を閉ざした。が、再び開く。
「負けたのか？町を守れなかったのか？」
「いゃ。あいつらの狙いはオレ達だ。人に被害はねーよ。改操もしたし、物体的なことも今は無理だが後で治すよ。」
心配したことは起きてない。そう思っても質問は止められなかった。
「勝つって言ったじゃんか。絶対に勝つって。俺信じてたんだよ。リサが勝つって。」
リサは言った。オレには勝たなきゃいけない理由がある。だから絶対に負けられないと。そんな姿に漣は憧れていた。純粋な強さを求める少年として。だから止められない。夢に裏切られた少年として。
「最強だと思ってたのは俺だけか。異能者は正義のヒーローじゃないの。」
漣の言葉は途中で止まった。否、止められた。
「素人が知った口を利くなよ！」
リサは声を張り上げた。張り上げて漣を見る。
「裏界の話は裏界の人間にしか分からない。現場に立ってないおまえに何が分かる！」
数秒の沈黙を経て、漣が話す。
「風呂は入ってるから、適当に入って。2回の空き部屋には龍吾と小菜木の布団を引いとくから。」
「・・・おぅ。」
朝まで誰も話すことはなかった。自分の言動を憾んだ漣も含めて。

朝、見たことない天井にぎこちない布団。
慣れない環境で目覚めた結は、上半身だけ起こしていた。近くの

携帯を取って時刻を確認する。
午前9時。いつもより2時間以上遅い起床にも抵抗はなかった。
ここでやっと昨日のことが思い出せた。嫌なことも全て。
低血圧というわけではない体は予備動作　＜以下：ボーっとする時間＞　無しで起き、階段を降りていた。
リビングにはもう、3人が揃っていた。
それぞれソファ　＜以下：龍吾と漣のいる場所＞　と食卓テーブルの椅子　＜以下：りさのいる場所＞　に腰掛けている。
無言を破ったのは龍吾だった。
「結。おはよう。」
他の2人も挨拶を交わし、もう一言。これも同じく龍吾から。
「顔を洗ってきなよ。それから本題だ。」
愛する人の元気を感じ、自分も元気なった結は気持ちを切り替えるためにも洗面所へ向かった。のだが。
「洗面所ってどっち？」
「「・・・あっち。」」
2人が指を指すのは結の背中側。踏み出したのと真逆だった。

結を元気付けるために笑顔を取り繕った龍吾は、先ほど聞いた話に確認を取っていた。
「漣、お前の言ったことに間違いはないし、欠点もない。だが、それをやればおまえは完全に裏の人間だ。泣こうが喚こうが元には戻れなくなる。それを理解した上での、生半可な気持ちじゃないんだろ？」
「うん、龍吾が疑うのも無理ないかもしれないけど、この気持ちは本物だ。昨日でやっと気付いたんだ。自分は日常を壊す現実から目を背け、都合のいい幻想を抱いていてたんだって。」
漣の目は違っていた。昨日の夜とは別人だ。目の下の隈もあわせ

て。
「りささん、漣がこう言ってますけどいいのですか？」
「あぁ。オレたちがこの作戦でしか倒せないのも納得したさ。」
まだパジャマ姿のりさは椅子の背もたれを前にして承諾した。
「龍吾、りさ。あいつらをぶっ潰そう。」
見たことない人に向けられた言葉に、今度は誰も反論しなかった。
口に出しては。

敗中（後書き）

能力とかで疑問点、矛盾点があったら教えてください。
うまく書けてるか自信がないんで・・・

切替（前書き）

受験生の中3が書いた戦い形の話です。
勉強もあって不定期ですが連載していきたいと思います。
初めての投稿なので温かい目で見てください・・・
尚、この物語はフィクションであり、登場する人物、団体などは・・・
＜以下：省略＞

切替

今は金曜の夜。闘いのあった日の夜だ。
時計の針は９０度を示し、時針の左に直角を作る。まだこのホテルに戻ってから数分しかたっていなく、２人の部屋人も外に着ていった服のままだった。
椅子に腰掛け、動けるだけの活力を蓄えた白いマントの男が口を開いた。その声は“両道”に再戦　＜以下：一時休戦＞　の確認をしたときより、はるかに弱々しい。
「リンナよ、早く寝ろ。明日も夕方まで動かぬとはいえ、それでも完全回復は望めない。できるだけ回復を試みろ。」
「しかし、司祭の怪我の治療は・・・。」
裏界の人間はこっちの世界の病院を使えない。
治癒能力が格段に上がってる異能者にとって、医療技術は不必要。それ故、偽装の戸籍すら作ってないことで警察ごとになる異能者に、病院は使えないのだ。時間のないときは特に。（時間のあるときはあるときで、勝手に治るので、結局使わないのだが）
だがら、今回のミカドの傷は深刻だった。
リュウゴにやられた一発は、肝臓を破裂させ、大量出血を伴っていた。
その状態で走り回り、防御に集中し続けたので、さらに悪化し血がマントに滲み出る程になっている。血が足りないのが原因で死んでもおかしくない。そんな状況だったのだ。
リンナの言葉は、医者程ではないが応急処置ならできるスキルを踏まえ、ミカドを心配してのもの。生涯のパートナーとしてもほっとくことできないだろう。
「簡単な応急処置なら我にもできる。それに、リンナのほうが重症だろう。」
この反論は、一般人であれば何を言っているのだと言いたくなる

ところだが、ミカドは間違っていない。
リンナの最後に使った能力は、“六束”の中でも技の使用から発動までの時間を長くする『遅延系』。すぐに効果の出る『速疾系』と大きく違う種類だ。
術をいつでも始動可能な状態に保つのには相当な神経を使う。1つでも壮大な労力を伴う仕掛けを数十個同時に使い続けるのは、相当な精神力 ＜以下：減ると力も減少する体力と同じく重要なもの＞ を削っていた。
「・・・それでは、すみません。明日もう一度治療します。」
「ああ、十分に休むといいよ。」
それから数分の処置をし、ミカドも眠りについた。

日付変わって土曜日。
最近増えつつある（？）北山家の住民はリビングに集合していた。
今居る面子は結の寝坊に驚いているりさと予想をしていた龍吾、頭の中にまったくそのことがない漣の3人。円形ではないテーブルを囲み、平日より遅い朝食をとっている。
白いご飯に味噌汁。それに加えて焼き魚。いつもがパンの1人にとっては珍しい和食が運ばれてから3分が経ち、落ち着いたところで会話が始まった。
「作戦会議・・・でもしましょうか？まずは、相手の分析からですかね。」
漣にでも解かる上っ面だけのセリフと愛想笑いは、昨日の状況を醸し出す。箸が空振りしているので、悔しさと心配があるのだろう。ポーカーフェイスに合わない、動揺の隠蔽工作失敗だった。
「昨日のは使用から発動までが長い能力の使用で間違いないんですね？」
「あぁ。それしか考えられないな。」

漣は昨日の夜に龍吾から出来事を全て聞いている。
“六束”のリンナは駆け巡った3分間にりさの創った妖精全てへ、術を使用していた。そして、発動しないダミーを使い龍吾と結を瞬間移動させ罠に追い込む。相手の能力を利用したリンナの作戦は見事なものだった。
まんまと嵌められた3人はミカド達を倒さねばならないのだが、龍吾と結は能力を使えない。
呪縛によって抑えられた能力で出来ることは、小菜木が枝を作るくらい。朝になっても消えない腕輪は戦闘能力を大幅に縮減させ、2人を闘いには不要だと忠告していた。
龍吾は気分のダウン　＜以下：龍吾個人だけの判断＞　だけで済んでいるが、闘いと龍吾が全てな結は深刻だと思われる。
「今闘えるのはりさだけなのか？」
こんな状況なので闘えるのはりさだけ。と、思っているのはこの場の半数以上　＜以下：全員ではない＞　だ。漣は何当たり前のことを、とも思っているだろう。
「龍吾が銃で狙うとかで闘えないのか？」
しかし、今の時代は銃があり、力がなくても十分に闘える。漣はそう思っていたし、実際にもそう。いくら異能があり身体能力が高くても、発動までのスピードが速い銃はかわせない。最終的に殺せばいいのだから銃でもいいのではと漣は思いついた。
だが、その考えは通用しないようだ。
「確かに間違ってはいないよ。実際にも異能者を一般人が撃ち殺したって例もあるし。ただ・・・。」
「プライドがあるんだよ。オレらにはな。前にも1回言ったことあると思うが、ちっと前までは三大原族が裏界を牛耳ってたんだ。そん時は能力を使えることが権力の証。科学の力に頼る奴はクズってこと。だから、今でも道具で人を殺す奴は貶されるし、偏見を持たれる。そんなら自分の力だけで闘って死んだほーがマシつーわけよ。」

プライドと命のどっちが大事なんだよ、と叫びたいのを漣は抑えていた。昨日の今日だし、自分は裏界に行ったことがない。口を出すのはだめだろうと思っていた。
だからといって、不利な状況が改善されるわけではない。りさ1人では明らかに戦力が足りなかった。何の策もなしに闘ったら、確実に負けるだろう。
りさは先にリンナを殺ろうと考えていた。基本的に術者を殺せばその能力は消える。つまり、リンナさえ倒せれば3対1となり、圧倒的有利となるのだ。しかし、そう考えるとリンナはミカドに守られるか、戦状にこないのどちらか。どちらでも倒すのは難しかった。
龍吾も同じことを考えてた。先に殺るためにどうするかまでも。名案が出るかどうかは別として。リンナを集中攻撃すればいいのかもしれないが、そうなると隙ができる。ミカドの攻撃もほぼ一撃必殺なので、あまり良い作戦ではない。手詰まりだった。
答えの出ない悩みを抱える2人に、再び漣が質問　＜以下：確認＞　する。
「余計なことかもしれないが、俺は闘えないのか。一応三大原族の、水の一族の1人なんだろ？」
「・・・ホントに余計な事聞きやがって。闘えねーよ。能力自体は使えるかもしれねえが、使う前に殺されちまうよ。ミカドなら瞬殺だ。」
りさは呆れながら答えた。昨日みたいに怒鳴りつけなかっただけ、まだマシだろう。
「それに、まだ水の一族だって決まったわけじゃない。他の可能性もあるから、分析してからのほうがいいと思うよ？」
りさと自分の容赦なき答えに気分を落とす。そう予想していた龍吾は少し驚いた。（顔には出していないはずだが）
漣のほうが予想通りと言わんばかりに頷き、もう1度聞きだしていたのだ。十中八九答えの分かる質問を。
「能力自体は使えなくもないんですね？」

「あぁ。そうだな。」
「じゃあ、能力を使うのに練習っていりますか？」
「いゃ。いらねえし、簡単だよ思うぞ。制御とか威力を無視したらだけどな。」
「それだけわかれば十分だ。」
そして、漣は二度目の口出しをしていた。
今度は理屈の通った正論で。

改操によって勉強会の存在を忘れさせられた陽奈は春香の家にいた。
時刻は１０時を過ぎたところだ。朝昼を一食で済ませるならこの時間帯で食べる人もいるが、陽奈も春香も生活リズムがいいのでそんなことはない。たとえ休日であっても。
そんな２人は勉強をしていた。いつも使う春香の部屋で、テーブル　＜以下：高さのない円状のもの＞　を囲みながらの作業。陽奈が質問して、春香が教える。これもまたいつものパターンだ。
ただ一つ違うのは漣がいないということ。
無論、ケンカしたわけでも仲間外れにしたわけでもない。用事があると言って断られたからだ。
だが、その用事は教えてくれず、時間がないからと一方的に電話を切られた。電話をかけた最初は急いでなかったのに、用事の内容を聞いたとたん慌てだす。そのままこちらに口を挟ませず通話終了。どう考えても怪しかった、が陽奈たちには何も出来なかった。
だからというわけではないが、今は勉強に集中していたところだ。
「ここがこうで、こうなる。」
「・・・つまり？」
「・・・こういうこと。」
ため息が出なかっただけマシと考えるかもしれないが、春香は龍

吾以上のポーカーフェイス。これくらいは朝飯前だ。（尚、今日の春香の朝食はリッチそうなものを想像してください。）
ため息の代わりに出たのは気になる疑問。指導する立場としてもが、それよりは幼馴染としてのほうが大きいだろう。
「陽奈。いつも以上に集中できてない。何かあった？」
「い、いや、何もないけど？」
何もないわけではもちろんない。朝から胸のうちに何かを感じている。自分の中で決めたものが根本的に揺らいだような、嫌な感じ。明確には分からないがすっきりとしない気持ち。
頭が悪いからではないが、考えても分からなかった。
ならば仕方がない、と吹っ切れるのも陽奈のいいところだろう。
「そう。ならいいけど。」
もう、同じ質問は来なかった。（少なくとも今日は、という但し書き付だが）

朝食を終えた漣は昨日の戦闘場にいた。
龍吾たちが治せなかったがためにそのままになっている市街地は、元々そうであったかのように誰も疑問を持たず、不思議に感じなかった。
土曜の特売品をゲットしにスーパーに行った帰りの主婦も、彼女を連れたリア充と呼ばれる大学生も、父と追いかけっこをしている小学生も、誰一人として目を向けない。道路の真ん中に転がっている家や電柱を。
歩いている軌道にあるのならば避け、それが無理なら飛び越える。
誰もが当たり前にその状況を受け入れていた。否、受け入れさせられていた。
今回改操によって強制的に送られた情報は、「今ある状況を受け入れる」が大部分だった。普段なら闘いの時間帯に起きた不都合を

記憶から消すのだが、決着が付いていなく再戦の可能性があるのならば消すのは終戦してからでいいだろう。それが上層部の対応　＜以下：龍吾からの情報＞　らしい。（消すのには受け入れさせるより、精神力を使い、２度もしたくない。それが上の本音だとは龍吾のみが知っている）

だが、その対応は正解なのかもしれない。現実に目を向ける少年にとっては。

道を歩き、異様な状況を眺める漣。その目に希望はなかった。

それでも悲しみはない。前　＜以下：現実＞　を見つめる目はひっくり返った家から、その下のコンクリートに向けられる。その舗装された道路は凹み、崩れ、ひび割れをしていた。

灰色の真下にあるむき出しの空間は、戦闘の規模を冷厳な事実として記している。

もしこの下に人がいたら、死んでいただろう。この能力を使ったりさは間違いなく相手を殺す気だった。

殺すか殺されるかの世界。改めて漣はそれを実感した。実感したが、それでも決意は揺らがない。何が漣の心の内を決めるのか。異能への憧れか。仲間を守りたい思いか。

それは漣自身にも分からない。

「結、闘う準備は出来たかい？」

季節に合った白いワンピースを着た結は首を縦に振った。お決まりの麦わら帽子はないものの、十分に似合っている、とは少し言いにくかった。良く言うならギャップだろう。

いつもなら、りさとかぶるが活発さを表現した服装。おしとやかな感じになったのは、この服が結のものではないからだ。

貸し出してくれたのは春香。他のは和服か、もっと似合わなさそうなものだったので、これが一番の有力候補になる。借り物なので

贅沢は言ってられない。今は我慢だろう。
「それじゃあ行こうか。」
「うん。」
こちらも漣から借りた服装を着た龍吾が結の手をとり、北山家へ向かう。
待機部隊がたどり着いたときには、漣しか家にはいなかった。

漣の家のすぐ近くには山がある。
それほど有名ではなく、高くもない。小学生の登山授業で使われるくらいだ。
そんな山に、普段人はいない。夜になれば尚更だ。
しかし、こんな前置きをするのは今の状況がそれに当てはまらないから。
山の登山口と頂上の間　＜以下：名前のしっかり付いている場所だが、ここにいる人は知らない＞　に小柄な人影がある。
腕を胸の前で組み、両足を開く。一言で言うなら仁王立ちだ。
そこに向かって、２つの違和感が近づいていた。
昨日よりも強い威圧感を出しながら。
リベンジマッチの開幕はもう目の前だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8615y/

恵まれない（？）裏方の北方前線

2011年12月16日23時51分発行